

研究

源氏物語に於ける漢籍引用の傾向と特色

古澤未知男

源氏物語には種々多数の漢籍が引用され、中でも白氏文集が質・量共に圧倒的優位を持つ事既に周知の通りである。そして其の文集を主軸とする漢籍引用の実態を検討する事によって、私は延いては源語の性格をも規定する事が出来ると考へて居る。(注1)が本稿主として其の引用の傾向と特色とについて述べて見たい。

一

白氏文集は元来七十五卷——現存七十一卷——詩文總數凡そ三千八百四十篇の龐大なものである。他の國文学作品の場合も同様であるが、源語作者は果して其の總てを通過して引用したのであらうか。或は又白氏文集は其の高い知名度のため、源氏物語以外の國文学作品にも広く引用されて居り、彼の和漢朗詠集も總句595の中、文集が137と、実に其の二三を占める高率である。されば若し源語・朗詠兩書に共通して採られて居る——その数は凡そ19に上る——場合、源語は果して其の何れからの引用であるか、直接か間接かの問題が生ずる。が結論から先に言へば、源語作者はやはり文集の作品全般を通過して引用して居り、又少く

も文集と朗詠との場合、それはやはり朗詠からの間接的引用ではなく、白氏文集直接の引用であると考へる。それは例へば須磨巻等に於ける文集詩文の引用に徴して明らかである。

須磨巻は源語五十四巻中でも特に和漢各種の漢籍や故事が多く用ひられ、而もそれが該巻其の場の情景や心情を写すに誠によく効果を擧げて居る。其の中の一つ、光源氏須磨落ち途中の一段に

うち顧み給へるにこしかたの山は霞はるかにて、誠に三千里の外の心地するに、權の雫も堪へ難し

とあり、やがて須磨に到着、習はぬ閑居に折からの名月を眺めては、頻りと都に思を馳せる情を述べ

月のいと花やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所々ながめ給ふらむかしと思ひやり給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。二千里外故人心とずし給へる、例の涙もとどめられず。……「夜更け侍りぬ」と聞ゆれどなほ入り給はず

見る程ぞしばし慰む巡り合はむ月の都ははるかなれども

その夜うへのいとつかしう昔物語などし給ひし御さまの、院に似奉り給へりしも恋しく思ひ出で聞え給ひて、「恩賜の御衣は今ここにあり」とずしつ入り給ひぬ。と記されて居る。さて此の「二千里外故人心」は、いふまでもなく文集雑律「八月十五日夜禁中獨直对月憶元九」の句に基づく。そして此句は普く人口に膾炙された名句秀吟たるの故を以て、和漢朗詠集にも採録されて居る。即ちここに前記文集か朗詠か、直接か間接かの問題が生ずる訳である。がしかしそれは源語本文の文面内容と原典文集詩句とを比較検討する事によって解決される。けだし文集「八月十五日夜云々」の詩は次の如くである。

銀台金闕夕沈沈、獨宿相思在翰林。三五夜中新月色、二千里外故人心。渚宮東面煙波冷、浴殿西頭鐘漏深。恐清光不同見、江陵卑濕足秋陰。

ついて見るに、先づ「今宵は十五夜なりけり」の書き出しは、恰も白詩標題「八月十五夜」に歩調を合はせ、「殿上」云々は勿論「禁中」や「銀台金闕」に相当する。又「月の顔のみまもられ給ふ」は「对月憶元九」に応ずるものがある。ここに「二千里外故人心」を引き、更に「夜更け待りぬ」云々は「夕沈沈」や「鐘漏深」に通ずる。そして「見る程ぞ」の歌は「清光不同見」を承け、同時に此段一節の締め括りをなして居る。但だ須磨から京の人を思ふのと、禁中から江陵の元九を憶ふとの主客の位置に違ひはある。けれども一文の構成は誠によく近似する。これが朗

詠本文に記されたものは、「三五夜中新月色」「二千里外故人心」の二句に過ぎない。朗詠此の二句だけでは到底源語此のやうな行文は生じないであらう。

なる程ここには「二千里外故人心とずし給へり」とある。詩歌を朗詠して意中を述べ、或は興を深めたりする事は古く中国にもあり、常時我国でも広く行はれ、源語にも屢見受けられる所である。和漢朗詠集も実にか、時代の要求から生れたものである。されば源語此の場合も、或はさういふ類聚・選集のものを詠じたのであって、文集直接の引用ではないのではないかと疑問も生ずる。けれども同文後に出る「恩賜の御衣は今ここにありとずしつ云々」と、菅家後集道眞の詩句も同様これを誦した事になって居る。がこれは朗詠には存しない。或は又柏木卷、薫の誕生に當つて、過去を持つ源氏の胸中を叙した

あはれはかなかりける人の契かな……と涙のほろほろとこぼれぬるを……静かに思ひて歎くに堪へたりと打誦し給ふ

の「静思堪喜亦堪嘆」（後統集・自嘲）も朗詠にはない。源語に引用して誦したとなつて居るものでも、必ずしも朗詠にあるものばかりとは限らない訳である。

尚又一方の「三千里の外」は同じく文集雑律詩「三千里外遠行人」（冬至宿楊梅館）に據る。「誠に三千里の外心地するに」の表現はいかにも文集引用の感を強くさせるが、これも亦朗詠には収録されて居ないものである。普く人口に膾炙されたものでもなければ、別に名句秀吟でもないからである。而もそれが名句秀吟として人口に膾炙された

「二千里故人心」と共に、源語には歴として引用されて居る事に注目しなければならぬ。即ち此の事はとりも直さず、源語がさういふ名句とか秀吟とか或は人口に膾炙したとかいふ事とは別に、広く白氏文集の全般から引用した事の証左に外ならない。

同様な例をいま一つ挙げて置きたい。それは「香炉峯下新卜山居草堂初成偶題東壁」及びそれに続く「重題」合せて五首一聯の詩の引用である。須磨卷光源氏閑居の段、又なくあはれなる秋の夜、獨り目を醒まして胸を傷めたといふくぐりに

枕を敬てて。四方の嵐を聞き給ふに、浪ただこもとに立ち来る心地して、涙落つとも覚えぬに枕浮くばかりになりけり

とあり、又總角卷、薫が今はなき宇治大君を慕つて悲しんだ所に

雪のかきくらし降る日ひねもすにながめ暮して、世の人のすさまじき事にいふなる十二月の月夜の曇りなくさし出でたるを、簾垂捲上げて見給へば向ひの寺の鐘の聲枕を敬てて今日も暮れぬとかすかなるを聞きて

と記されて居る。朗詠にも採られた有名な「敬枕聽」「撥簾看」の二句が引かれる、其の詩は左の如くである。

日高睡足猶情起、小閣重衾不怕寒。遺愛寺鐘敬枕聽、香炉峯雪撥簾看。匡廬便是逃名地、司馬仍爲送老官。心泰身寧是歸處、故郷何獨在長安。

ついで見るに、先づ總角卷であるが、薫が「簾垂捲上げて見」たのは文集の「雪」ならぬ十二月の「月」である。

が「枕を敬てて聞い」たのは、正しく文集と同じ「寺の鐘」の聲である。既に此の句が「香炉峯」詩を思はせるに十分である。而もここでは「簾垂捲上げ」「枕を敬て」の兩句が同文同時に相對して用ひられて居る。これが「香炉峯」詩の引用である事は一見殆んど疑問の餘地はないであらう。

他方須磨卷では、源氏が聞いたのは文集や總角卷の「寺の鐘」の聲ではなく、それとは全く違つた「四方の嵐」となつて居る。けれども恰も總角卷で「簾垂捲上げて見」た「雪」が「月」に變つたと同じく、これも「枕を敬てて聞いた「鐘の聲」が「四方の嵐」と転用されたと見て良い。

且つ「枕を敬てて」といふやうな漢語的表現はどうしても漢籍——文集等の存在を首肯せしめる。即ち私は總角卷は勿論須磨卷も「簾垂捲上げ」「枕を敬て」は文集「香炉峯」詩句の引用であると考へる。がここでも其等が直接文集よりの引用であるとするには尚一つの問題が残る。それは同じ此の詩句の採られた和漢朗詠集との關係である。がこれ

亦文集直接引用を証する有力な論據が得られる。それは恰も前項「二千里外故人心」の場合と同じく、前記「香炉峯」詩五首中の朗詠にない他の一首が同じ須磨卷に引用されて居るといふ事である。其の詩は

五架三間新草堂、石階桂柱竹編牆。南簷納日冬天煖、北戸迎風夏日涼。灑砌飛泉總有點、扞牕斜竹不成行。來春更葺東廂屋、紙閣蘆簾著孟光。

の如くであるが、其の第二句「石階桂柱竹編牆」が光源氏閑居草庵の様を叙した所に用ひられる。即ち住ひ給へるさまいはむ方なく唐めきたり……竹編める垣

しわたりて石のはし松の柱おろそかなるものから珍らかにをかし

と只一つ「桂」が「松」に変へられただけで全句そのまま引用され、而も其の前には態々「いはむ方なく唐めきたり」との修飾まで附せられて居る。のみならず此の須磨巻では光源氏此の度の須磨落ちが世を憚る忍びの行であれば

かの山里の御すみかの具はえさらず取り使ひ給ふべき物ども、殊更によそひもなく事そぎて、又さるべき書ども文集など入れたる箱、さては琴一つぞ持たせ給ふ。所せき御調慶花やかなる御よそひなど更に具し給はず、怪しの山がつめきてもてなし給ふ。

と、源氏離京に當り、其の手廻り品總て簡略に止めた中にあって、特に「文集」と「琴一つ」だけは携行を忘れなかつたと言ふ。言ふ迄もなく此の「琴一つ」はやはり雜律の部に収められて居る楽天謫居の記「廬山草堂記」の「漆琴一張」を取つたもの、而も態々「琴一つ」と其の数までも合はせて居る。更に此の「琴」は明石上出現に至る物語構想の上でも、尚後まで糸を曳いて展開する重要な意味を持つものである。

かくて須磨巻に於ける「文集」——「香炉峯」詩の引用は誠に歴然たるものがある。そして本項大切な事は其の引用された「香炉峯」詩二首の中一は名句秀吟として普く人口に膾炙され、朗詠にも採られたものであり、之に反して他は名句秀吟でも人口に膾炙されたものでもなく、従つて又朗詠に採られたものでもない。而も尚源語では其の両首が依然として併せ引用されて居るといふ事である。即ち其

の文集全般を通覧した文集直接の引用たる事前詩の場合と、全く同轍である。

二

次に源語に於ける漢籍引用の大きな傾向・特色として曲折・変化の問題がある。つまり源語の巻々によつて引用の様式や形体、或は種類や濃度等に著しい相違の存する事である。

例へば冒頭桐壺巻は、1.或帝王が(帝王) 2.佳人を見出し(佳人) 3.これに格別の寵愛を傾けたが(殊寵) 4.愛人先死し(愛人先死) 5.残された帝王は追慕悲歎に暮れる(帝王追慕) 6.茲に使者を派して愛人の靈所を訪ねしめ(使者派遣) 7.その結果形見の品が齎される(遺品寄託)と、其の筋書・構想の總てに亘つて殆んど文集「長恨歌」の摸倣踏襲と言つて良い。——勿論それでも尚仔細に検討すると、例へば女性の美の類型や性格・人物或は神仙説の有無等、著しい相違もあり、これは一面日中両文学や國民性の相違等を示す重要な要素をも含んで居る。——そして此の巻に於ける漢籍詞句の引用は總て其の長恨歌(含伝)のみ、總句数145中9で、他の漢籍詞句の引用は全く唯の一つもないといふ特異な現象を呈する。

次に巻二帯木巻所謂雨夜品定めに展開される女性觀や結婚論は

今はただ品にもよらじかたちをば更にも言はし。いと口惜しくねちけがましき覚えだになくば、ただ偏に物まめやかに静かなる心の趣ならむよるべをぞ遂の頼み所には思ひ置くべき

であり、それは例へば手書きにしても

誠のすぢを細やかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今一度取り並べて見れば、なほじちになむよりける。

で、「ただ偏に物まめやかに」「なほじちになむよりける」といふ其の実意・誠実第一主義は、正しく此中に引用された文集諷論詩「議婚」のそれと歸趣を一にする。「議婚」は左の如くである。

天下無正聲、悅耳即爲娛。人間無正色、悅目即爲姝。
顏色非相遠、貧富則有別。貧爲時所棄、富爲時所趨。
紅樓富家女、金縷繡羅襦。見人不斂手、嬌癡二八初、
母兄未開口、己嫁不須臾。綠窓貧家女、寂寞二十餘、
荆叙不直錢、衣上無真珠。幾回人欲聘、臨日又踟躕。
主人会良媒、置酒滿玉壺。四座且勿飲、聽我歌兩途。
富家女易嫁、嫁早輕其夫。貧家母難嫁、嫁晚孝於姑。
聞君欲娶婦、娶婦意如何。

富家の女嫁する事早きも実意なく、対して貧家の女容易に婚を得ざるも実意あり、君其の何れを取るやと、樂天が時弊を諷して其の結婚觀を問ひ掛けた体のもの。婦を娶る事の貧富によらず、宜しく実意によるべきを説いた一首の趣旨は紛れもなく源語に通ずる。——尤もここでも議婚は其の諷論詩といふ特殊の目的性格上、単に貧富・華実・情理を一方的に對立せしめた。唯それ丈である。之に反し源語は其の両全を説き兼備を主張した。貧富必ずしも一方的に片づけず、種姓・家柄・地位・財力を説き、更に実意・情趣・知性の三者兼備し、而もそれが過不及なく適度中庸

なるべきを論ずる。視野を広げ内容を豊かに總じて頗る複雑多様となつて居る。そしてこれ又外ならぬ源語創作の優秀性を示すものである。——そしてここで面白い事は、其の趣旨内容右のように密接な關係を有し乍ら、詞句引用となると「聽我歌兩途」をそのまま訳して「我が二つの道歌ふを聞け」と引かれる丈である。此の点前の桐壺巻に於ける長恨歌の引用とは全く逆の好対照を見せて居る。そして更に青木巻では右議婚詩句の外、同じく諷論詩「上陽白髮人」が2句、雜律「夷陵三宿……贈微之十七韻」1句、又後統集「偶吟」1句が引用される。勿論何れも文集である。尤も最後の偶吟「不繫舟隨去住風」による「繫がぬ舟の浮きたる例」は文選「鷓鴣賦」に「泛乎若不繫舟」の類似句がある。果して其の何れか今俄には決し難い。が文集主体といふ全般の大勢には何等変る所はない。

第三に須磨・明石巻がある。これは前二者に對し一卷全体の筋書や構想等にそれ程纏まつた影響關係は認められない。がしかしここでは和漢各種の漢籍漢詩文学作品が極めて広範且つ多数に引用される。——勿論ここでも文集8（感傷1雜律7）、道眞4、和漢朗詠集3、史記・文選各1と、文集が依然として圧倒的多数を占める。それは前二者、或は源語全般を眺めても全く同様である。源語と漢籍とを見るとき、何を描いても文集を外にしては論ぜられない。源語と文集との特別不可分な關係を端的に示す最も有力な証左でもある。——そして其等は恰も源氏と同じ配流・流謫の憂目を見た作者や作品、事件や人物を配して、念頭常に和漢を對比しつつ、源氏の流過・閑居といふ本兩巻の内容

や特質によく適合し、以て其の境涯や心事を描くに多大の効果を収めて居る。

かく同じ文集でも桐壺巻は「長恨歌」一本、帚木巻は「議婚」を主軸に文集他の部門が加はった。対して須磨・明石巻は、そのやうに「長恨歌」や「議婚」或は「文集」等と限定せず、文集以外新に多数の漢籍漢詩文学作品が広く集め取られた。即ち巻々によつて著しく引用の形体を異にして居る事に注目したい。(注2)

或は源語は三部に分れて構成されると言はれる。が其の第三部所謂宇治十帖に、文集諷諭詩「李夫人」が多く引かれる。總角・宿木・東屋・蜻蛉の四巻に詞句3があり、頻度数6を数へる。蜻蛉巻に「人木石に非ざれば皆情あり」と原詩そのまま訳して引かれた「李夫人」の「人非木石皆有情」は、何か浮舟入水に至る宇治十帖の行方や結末を暗示象徴するやうであり、両者の間確かに何か引用因果の關係があるやうでもある。(注3)而も「李夫人」の引用は此の宇治十帖に限られる。又以て桐壺や帚木、或は須磨・明石等と並んで、源語に於ける漢籍・文集引用の特異の現象である。

又其の第一部桐壺より藤裏葉に至る三十三巻が、正系本筋の長篇の物語と傍系副筋の短篇的説話との二つの系列に分れるとは、既に先学諸家によつて提唱されて来た所である。

右の中武田宗俊氏は、前者を紫上系、後者を玉鬘系と名づけ、玉鬘系後記挿入の立場を取られた。即ち紫上系一連の物語が獨立して先づ完結されて居たのを、其後作者の文

りて七巻ると、文集が絶対的に多くはなつて居る。けれど

芸観・人生観の發展生長の結果これのみに慊らず思ひ、茲に玉鬘系諸巻を挿入して、其の単調平凡をより複雑深化せしめんとしたものであると論ぜられた。(注4)

而して氏は玉鬘系後記説の理由の一つとして、漢籍や仏典故事の引用の問題を取り上げ、先づ漢籍では

紫上系では史記が多く、玉鬘系の巻には全巻を通じて史記は一度も現はれない。……玉鬘系で多く見られるのは白氏文集で、紫上系では後の挿入かと思られる桐壺の長恨歌を用ひて居る所を別にすれば玉鬘系より少い。(源氏物語の研究)

と言ひ、次いで仏典故事では

第二部第三部には仏教の故事が多く……第一部では……玉鬘系の巻の方に比較にならぬ程多い。……これ両系の成立の間に年月の隔りがあり、玉鬘系は紫上系の文より第二部第三部に近いものと考へたい。(全上)

と説かれた。ただし前述の如く、源語に於ける漢籍引用が巻々によつて種別・度合等頗る趨舎を異にして居り、此の第一部亦多分にそういふ傾向が認められる。それは確かに紫上系・玉鬘系といふやうな異つた系列の存在を思はしめるものがある。但だ然し例へば行幸巻「羽を並ぶる」の典拠はどうも史記と思はれる等「玉鬘系に史記の引用は一もない」とされるのは問題があり、更に文集の引用に至つては、事實は氏の言はれる所とは大いに事情を異にする。

即ち文集の引用は紫上系の12巻32、武田氏の言はれる桐壺巻の長恨歌を別にしても、尚11巻25となる。一方玉鬘系は9巻24で、成る程史記の例外的にあるかないかの僅少な

云々

のに比べると、文集が絶対的に多くはなつて居る。けれどこれに紫上系に対比すると、引用巻数から言つても句数から言つても、氏とは逆に遙かに紫上系に及ばない。且つ又其の「長恨歌」にしても、決して桐壺巻だけにあるのではない。紫上系他の巻（葵2、絵合1）にも、玉鬘系（夕顔・真木柱各2）にも用ひられて居る。如何に見ても「紫上系が玉鬘系より少い」といふ事は絶対でない。現に紫上系須磨巻を取つて見ても、前述の如く種々多数の漢籍漢詩文が綜合して引用されて居る中であつて、引用詞句の面からも、又内容の上からも、文集は寧ろ断然他を圧するの勢を示して居るからである。それより私は文集諷諭詩の介在を問題にしたい。

即ち諷諭詩は玉鬘系は7巻12で、同系引用文集9巻24に比すると、其の大部分の巻に諷諭詩があり、句数も全句数の半に及んで居る。之に対し紫上系では諷諭詩の殆んどそれらしいものを認めない。けだし桐壺・帚木巻は夫々紫上・玉鬘系の冒頭にあり、恰も其の系列の序に相当する。そして此の両巻が前記感傷「長恨歌」及び諷諭「議婚」に深い關係を有する。かく両系の冒頭序巻を飾つて一は「長恨歌」が他は「議婚」が用ひられる。而もそれは該巻爾後の発端をなして大きな役割を演じて居る。そして其の諷諭こそは彼の紫式部日記にも

宮の御前にて文集の所々読ませ給ひしなど、さる様の事
知しめさまほしげに思ひたりしかば、いとしのびて人も
侍らはぬもののみまひまに、おとどしの夏頃より、樂府
といふふみ二巻をぞしどけなくかう教へたて聞へさせ侍る

云々

とある通り、作者式部かねてからの愛読書であり、——樂府は諷諭に属する——同時に源語に於ける漢籍・文集引用の重要な柱を成すものである。（注6）此等の事を考へ併せる時、諷諭詩の有無は確かに両系成立の事情や性格の相違を示唆するものではないかと誠に興味深く感ずるのである。鬼もあれこれ又源語に於ける漢籍引用の傾向に大きな特色を示すものといふ事が出来よう。果してさうだとすれば、これは一体何に因るのか、或は何を意味するのか、當然考へなければならぬ問題である。今述べた第一部紫・玉両系に於ける文集諷諭詩の有無は、武田氏の「成立時期に隔りがある」とされる其間の事情を物語つて居るやうでもある。又桐壺巻のあのやうな引用形体は武田氏も「後の挿入かと思はれる云々」と言はれるやうに、これはどうも源語全巻の冒頭に据ゑる特別の意図を以て後に書き加へられたものではないかとの感を強くする。本稿紙幅の關係で省略したが、桐壺・帚木・須磨明石の三様式に於て、何れも物語爾後の展開に關する重要な引用企図が見られる。桐壺巻では其の引用源となつた長恨歌の遺品寄託の條鉤合金叙に相当する御装束一領、御髪上の調度めくもの、及び光源氏の参内、帚木巻では女性論の歸趨に絡まる藤壺・紫上の出現、又須磨・明石の巻では「琴一つ」に溯源する明石上の出現等がそれである。が此等の事をも考へ合はせると、桐壺後記挿入の感は更に一層深いものがある。或は俗に式部は若紫の巻から書き始めたとも言はれ、更に極端な話になると、宇治十帖は全く別人の作になるといつた説さへあ

る。其の當否はさて措き、源語卷々の制作成立時期の問題等については、今日尚殘された検討の餘地があるやうにも思はれる。而もそれは源語研究の重要課題である事も亦論を俟たない。

以上之を要するに、源氏物語に於ける漢籍引用の傾向や特色として、本稿主として

1. 先づ白氏文集の引用は其の全巻を通覧して行はれ、而もそれは例へば和漢朗詠集等を介した間接的引用ではなく、あくまで文集直接の引用である事。

2. そして其の文集以下諸漢籍の引用には、例へば桐壺・帚木、須磨・明石乃至宇治十帖の諸巻、或は源語第一部所謂紫上・玉鬘兩系の存立等、卷々によつて様式や形体、或は種類・濃度等に著しい差違曲折の存する事。

の二点について少しく私見を述べた次第である。(注7)

(注1) 拙著「漢詩文引用より見た源氏物語の研究」櫻楓社。尚本稿詞句引用一覽、並に集計、或は諷論・閑適・感傷・雜律・後続集等文集五種の分類等については同書参照。

(注2) 國語と國文学第二十九卷第七號、拙稿「源氏物語に於ける漢詩文引用に関する一考察」、並に前掲拙著

(注3) 三田村雅子氏に形代の問題に焦点を當てた論考がある。文芸と批評第三卷第七號「李夫人」と浮舟物語—宇治十帖試論—

(注4) 武田宗俊「源氏物語の研究」岩波書店

(注5) 熊本女子大学学術紀要第十一卷第一號拙稿、源語

「羽を並ぶる」典據考、並に前掲拙著

(注6) 前掲拙著

(注7) 其他前記五種の分類中、所謂閑適からは源語には一の引用もない。のみならず雜律・後続集で、明らかに閑適的性格を有つたものでも、源語では寧ろ却て感傷として引用される事、或は本文一言した引用企圖の問題等、尚論すべき事も少くない。が本稿紙幅の關係上一切割愛する。

(本学教授)